

りんご半わい化栽培現地講習会開催！

りんご・もも部会新聞

暦の上では立春を過ぎた2月12日(木)に、りんご半わい化栽培の基礎となる整枝・剪定方法の現地講習会が開催されました。悪天候が心配されましたが、当日は快晴となり、多く参加者が訪れました。

講師は、数年前から県内外で関心が高まっているりんご半わい化栽培を考案した戸谷公次さん(73)。氏は、県内外で自身が考案した栽培方法を多くの産地で講師として指導しています。氏自身は、剪定の指導はほとんど行っていない…と語っていましたが、中野市へは2年連続で指導にお越し頂きました。

当日は、昨年の講習会で剪定した樹を使い、キーポイントとなる整枝法・誘引法を中心に指導いただきました。2年目の剪定となり、いよいよ主枝が4〜5本確立された開心形が完成してきました。初めて半わい化栽培の話を書く参加者も多いため、栽培マニュアルを詳しく説明し、そのうえで整枝法の実技に行って頂いたため、参加者の理解も深まったと思います。

当日の参加者からは多くの質問が出され、半わい化栽培への関心の高さが覗いしれました。来年も講習会を行って欲しいとの声も多々聞かれました。

近年、生産効率の向上目的とした早期多収穫栽培の普及が進んでいます。りんごは他の品目と比べると、成園化するまでに多くの時間がかかるため、それを解消する手段として、県で普及している新しい化や今回テーマとなった半わい化等の栽培方法の関心が高まり、同時に導入も年々進んでいます。

会場となった畔上慶一氏園でも、平成20年に新植し、本年度8年目を迎えますが、主枝が確立されていないため、十分な生産量は確保できていない状況です。しかし、今回の講習会で生産の柱となる主枝を出来るだけ早めに4本決めて(開心形仕立て)、ここに結果枝を数多く配置することで、早期に生産量を確保していくことが可能であることが学びました。

北部地帯は降雪量が多く、雪に弱い新しい化栽培の導入に踏み切れない生産者も多いのが現状です。しかし、今回のテーマである半わい化栽培であれば、降雪にも強く、かつ早期多収穫が可能な栽培方法であることが学びとれたかと思えます。主催者の高野広信指導部長は「部会としても、年々弱体化する生産基盤の若返りの一つの施策として、半わい化栽培を普及したい。」と総括されました。それにしても…73歳になる戸谷さんの熱意はスゴイと驚かされる一日でした。

発行
りんご・もも部会
生産指導部
問い合わせ先
営農センター
TEL 23-3933



←大勢の参加者を前に栽培概要を語る戸谷氏(73)。(写真中央)



←樹の中央部に48口径支柱を設置して主枝を釣り上げる。写真は7年生樹。



←5年生樹の整枝法。この段階で主枝4本程度を決めることがポイント。



←4方向から主枝を吊りあがる方法。主枝を早めに養成するポイントらしい。